

後藤横浜事務所の取り組み



Q、後藤横浜事務所では「3つのコンセプトと4つの提案」をベースに設計活動をされています。まず、コンセプトの1つ目「本質にこだわる」について、教えてくださいませんか。

A、建築は色や形ではなく、その本来の使われ方や意義、つまり建築としての「本質」に基づくことが最も大切である。私たちは、そう考えています。例えば、住宅をモダンでシックに創ることよりも、幸せを育むための工夫を取り入れたい、ということですね。

私たちが手掛けたクリニックを例に挙げてみましょう。クリニックの本質は病を治すことです。ですから当然、建築もそれに準じなければなりません。地域の人々がクリニックに求めるもののひとつに、先生がいつもそこにいてくれるという「安心」があります。そこで私たちは、1階のクリニックが閉まったあとも、2階の先生の住居からやさしい灯が漏れるような建物を造りました。つまり「安心」を建築で表現することによって、病を治すというクリニックの本質をサポートしたわけです。特別、新しいことをしたわけではありません。

商業施設の場合は、利益を上げるという命題に答えを出さなければなりません。そのために、まずはインパクトで人々の「気づき」を導く。次に、楽しんでもらうための「非日常性」、そして口コミにつながる「話題性」を加えていく。オフィス空間であれば、ビジネスの世界に挑む緊張感を漂わせたい。このように、私たちは常に建物の本質に立ち返り、大きな視野で新しい発想にチャレンジしています。

Q、2つ目のコンセプト「物語を作る」とは、具体的にどういったプロセスですか。

A、建物を設計するときには、まずその建物で繰り広げられる物語を考えます。例えば「外で暮らす家」というテーマの場合はこんなストーリーから始まります。

『夏の朝、テラスのテーブルに置かれたガラスのコップの水に、木の葉越しの朝日がまぶしいほどキラキラと輝く。いくつもの水が二斉に弾け、コップの中で踊る…』これは、川端康成のカハラヒルトンの風景です。

そこで私たちは「朝をテーマに、朝日のあたるダイニングを作ろう」と考えるわけです。さらに「穏やかな朝には早朝の神社の神聖さがある」という発想から、「お香が漂う和室を我が家の聖地にし、リビングから眺められる上段に鎮座させよう」と想像が膨らみます。飲食店であれば、誰と、どんな服を着て、どん

な気分か食を味わいたいか。それを想像して、そのストーリーに似合ったレストランを創ろうと考えます。つまり、その建築における物語（シーン）を具体的に次々とイメージレーションすることで、もっともふさわしい空間を提案することができるとのことです。

Q、最後のコンセプト「クライアントの成功に一生懸命」について教えてください。

クライアント（オーナー）の意見はどんな些細なことでも逃してはいけないし、好みは徹底的に反映すべきです。しかし、あまり捉われないうほうがよいこともある。というのも、オーナーでも気づかない盲点というものがあり、必ずあるからです。

再度、クリニックを例に挙げます。ドクターの中には、「患者さんが体調の悪い中、わざわざ足を運んで来てくれている」という概念がない。方も時にいらつしやいます。すると、椅子はただ座るためにあればいいし、プライバシーもパーテーション程度で守れるだろう、となくなってしまふ。そこで私たちは患者さん目線に立ち、心地よく迎えられる空間を提案するのです。このことは、必ず具体的な利益となって帰ってきます。

それから、先入観を持たないことも大切。クリニックだからこれでいい、マンションだからこれでいいということはない。過去のデータや慣例にと

らわれているのは、建物の本質としっかり向き合うことはできません。建物ができるまで順調に進むに越したことはないですが、本当にいいものを創ろうとするときは、情熱があるほどぶつかり合い、立ち止まったり後戻りしたりすることになります。でも、包括した答えは必ずあるはず。大切なことは、私たちが純粹に建築を志した時や、ドクターの皆様が患者を救うために医学を専攻された頃を常に思い出し、力を合わせて本当の成功を目指すこと。そういう仕事こそ、ワクワクします。



Q、では、今度は4つの提案についてお聞きします。1つ目の「時間がたてばたつほど価値が出るマンションの提案」とは、具体的にどんな提案ですか？

A、建築物は大切な財産です。せっかく建てたマンションが目減りしては困りますね。本来、マンションは新しければよいというものではありません。しかし、新築物件に人気が集まるのが現実。古いマンションはどんどん価値が下がっています。

ワインのように、マンションを時間が経つほど価値が出るものにするためにはどうしたらいいか。それには「文化」が必要です。

当然ながら建物は頑丈に造りますが、建物だけで資産価値を上げていくのはやはり難しい。でもそこに、赤ひげ先生が引っ越してきた。作家の岡本太郎が引っ越してきた。となると、そこに文化が生まれる。みんなが住みたいと思うマンションになります。

文化というのは、人々のコミュニケーションで生まれます。今のマンションのように、家の周りに触れ合いがない密閉したような造りでは、なかなか文化は生まれません。ヨーロッパの文化が広場で生まれるのに対し、東洋の文化は道で生まれます。祭りも、市も道で行われますね。ですからマンションに「道」を創るのです。文化のあるマンションでは、人々も生き生きしています。

出たときにひ弱になってしまいます。住宅は、時には母のように厳しくなければいけない。その中で、時には凜とした生活を送ること。そこが、究極のリラックスなのです。

オフィスの朝も、本当に気持ちのいいものです。同じ1時間かと思うほど仕事はかどります。2時間早く出社すれば夜が2時間短くなり、エコにもなりますね。オフィスが凜とした空間だったら、会社の業績も上がるのではないのでしょうか。

Q、最後の「大人が生き生きとする街づくりの提案」とは、具体的にどういうことでしょうか。

A、かの巨匠フランクロイドライトは、六九歳の時に落水荘を建築しました。ジョンソフワックスビルは七二歳と七七歳の時の作品。タリアセンウエストやクッゲンハイム美術館は、なんと九二歳の時に手掛けたものです。

人間にとって幸せなのは、生涯現役で、いつまでもまわりから必要とされること。人生の先輩方には、もっと輝いてほしい。そして、若者に多くのことを教えてほしい。かつてニューヨークの商社で活躍していたなら、アメリカのことを教えてほしい。お花の先生だったなら、女学生に花の心を聞かせてほしい。校長先生だったなら、若者の悩みを聞いて手をさしのべてほしい。そんなふうに、街が大人に頼り、お年寄りも現

る。それは、幸せな住まいです。すると、マンションにどんどん価値が出る。少しくらい値が張っても、そこに住みたくなるのです。

私自身、物を大事にしたいという思いから、不便だから壊すという概念があまり好きではありません。できれば、直して価値を与えるという発想を大事にしたい。日本では親からもらった家を子や孫が壊して建て直しますが、それだと建物の価値はいつまでも変わらず、お金だけがかる。でもヨーロッパでは、代々修復して家屋に価値を与え、出費を抑える。ヨーロッパ人が日本人ほど勤勉でなくても豊かな理由は、ここにあるのかもしれない。

Q、「建物の外側は街に開放した方が良いという提案」について、なぜ外に開放したほうが良いか、教えていただけますか。

A、新宿やみなとみらいなど、高層ビル群が立ち並ぶ街は、ガラスをはめ込んで外壁を覆ったコンクリートジャングルです。このような街並みは荘厳で近未来を予感させますが、どこか殺風景ですね。まさに、人見知りの街です。一方、浅草の街はどうでしょう。道行く人に開放的で活気が溢れています。建築は、外部と一体化したときに生き生きと動き出すのです。

私たちは、外と繋がりを、街を生き生きさせる建築づくりを提案しています。オフィスビルに限らず、住宅、クリニック、商業建築でも、これは

役として輝く環境を作りたいのです。

老人ホームなどと呼んで若者がお年寄りを診る社会ではなく、お年寄りが経験と知恵を活かして若者に発信する街。そんな街には必ず厚みが生まれます。年配の方には、教えてもらうことがまだまだたくさんあると思うのです。

Q、最後に、後藤社長の建築に対する思いを聞かせてください。

建築物は、単なる箱ではありません。人間は空間に影響されます。場の持つ力を信じると、人の一生はもっと豊かになります。建築空間が人生にどれだけの影響を与えるか、みなさんにもぜひ気づいていただきたい。

また、私は「二枚目半」の建築が好きです。二枚目はとつぎにくいでしょう。映画でも、寅さんや釣りバカなどのシリーズ物では、主人公は決して二枚目ではありません。親しみがあつて、心地よくて、いつまでも飽きないのが二枚目半。住宅でも商業施設でも、二枚目半こそが人の心に触れる「共鳴ライン」だと私は考えています。それは、見かけに頼れない本物の強さである種の覚悟みたいなものがあるからです。私たちはいま、中国にも事務所を構えています。いろいろな仕事舞い込み、中には順調に進まないプロジェクトもありますが、それでも果敢に新しいものに挑むことがとても楽しい。上海の街を歩くと、歴史的建造物があつたか

重要なテーマです。そういえば、外で食べるおにぎりがとびつきり美味しかったり、野外コンサートがことのほか盛り上がりつたりしますね。もしかしたら、それも同じ理由から来るのかもしれません。

Q、「朝をテーマにする建築の提案」とありますが、朝をテーマにする理由とは。

A、住宅というと、普通はリビングでの団欒をイメージするものです。しかし私は、朝日の入るダイニングを住宅建築の基準としています。住宅の本質は、一日のエネルギーが満ちている朝にあると思うのです。これは、リラックスとは何かを突き詰めて考えた結果、行きついた答えです。

リビングで寝転がって、ガラガラとテレビを観る。これはリラックスではなく「ゆるみ」です。住宅の基準をリビングにすると、生活の軸がゆるみになります。神社や寺に入ったとき、背筋がピンと伸びて、心が浄化されたような感覚になります。私は、そこが本場のリラックスだと思っています。朝のダイニングを基準にすることで、あの背筋の伸びる感覚で一日を送ることができるのです。

また、住宅が極端に快適すぎるのもよくありません。本来、人は厳しい外の世界で社会生活を送る生き物。外を遮断し機械でコントロールした家は人を甘やかします。それでは、外に思うと、UFOのようなテレビ塔がある。色とりどりの建物が目に留まり、街がエネルギーシユで、建築にも夢があります。

街づくりにおいては、都市の機能化されたシステムも大切だとは思いますが、人が楽しんで外に出て、人と触れ合うことも同じく大切。人同士が触れ合うと街は広がります。日本でも中国でも、映画「Always三丁目の夕日」のような世界を未来に投影した街づくりが、今後のメインコンセプトになりそうです。

